

スキー修学旅行を通しての環境教育的な地域学習

—— 長野県志賀高原一ノ瀬スキー場の事例を中心として ——

菊 地 達 夫*

キーワード：環境教育，旅行集団宿泊型行事，スキー修学旅行，スキー学校，志賀高原

I. はじめに

今日、自然に親しむことをねらいとした余暇活動が増加している。行楽地では、このブームに後押しされる形でオートキャンプ場など整備され高い人気を誇っている。さらに、「遊び・レジャー」をテーマとした雑誌には、アウトドアスポーツの掲載も多い。この背景には、1990年代に入って盛んに強調された環境問題や環境教育の重要性、若年層をはじめとする体力低下、コンピューターを中心としたメディアゲーム¹⁾の急増などがあげられる。

学校教育では、従来より自然体験を生かす行事を遠足・修学旅行などで実施してきた。また、環境教育の社会的評価を受け、地理教育・理科教育などで野外学習を積極的に普及させる動きも見られる。さらに旅行・集団宿泊の行事でも、環境教育的な活動が全国各地で拡大している。とりわけ、北海道では宿泊研修とした学校登山を自然体験型学習として長年実施してきた²⁾。また、西日本地域では、上信越スキー場でスキー修学旅行を継続してきた。そうした中で、都市域の高等学校の一部では受験勉強や学校週5日制の移行などに伴い学校行事を削減する傾向にあり、自然体験を生かした学習の機会が少なくなっている。また、旅行・集団宿泊の行事の目的は、自然に親しむ学習活動より集団規律や団体行動のあり方といった点が強い。これは、今日的な環境教育の内容を軽視する大きな問題であり、現場の教師からも批判的な意見が聞かれる³⁾。

本稿では、学校教育での旅行・集団宿泊型行事内容と環境教育の内容を概観し、スキー修学旅行を通じての環境教育的な地域学習の事例を具体化

させ、今後のスキー修学旅行のあり方を提言しようとするものである。とくに、環境教育的な地域学習の事例は、筆者の体験に基づき、長野県志賀高原一ノ瀬スキー場でのスキー修学旅行の実態をスキー学校側からの視点より詳細に述べる。これは現地における指導が、スキー学校主体に展開されるためである。筆者は、1992年～1994年の冬季期間に長野県志賀高原スキー場をはじめとする各地でスキーインストラクターとして勤務し、主として初心者・初級者を中心に幼稚園・小中高校・大学・社会人の団体スキー指導を行っていた⁴⁾。よって、ここで提示する事例内容は、1992年から1994年までに得られたものを中心とする。

II. 学校教育における旅行・集団宿泊の行事の意義と環境教育の内容

1. 旅行・集団宿泊の行事の意義

旅行・集団宿泊の行事は、第5次学習指導要領改訂（平成元年）で特別活動の学校行事の中に位置づけられた。その具体的な活動内容は、「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活のあり方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」としている。旅行・集団宿泊の行事の中で代表的な修学旅行（見学旅行）は、昭和33年に教育課程で位置づけられて以来、総合的学習活動として高く評価された日本特有の教育活動である。

修学旅行の理念は、大きく3つあり(1)自然・文化に親しむ、(2)人間形成、(3)公衆道徳の習得といった基本方針をもつ。(1)では、日本国内の文化や経

*札幌創成高等学校

済や政治などの主要地を実際に見聞し、既習した内容の確認や発展の機会を与える。とくに、京都や奈良を多くの生徒児童が訪れる理由は、古来の優れた日本文化遺産が現存・保存され、現代社会の中で歴史的な価値を認識しやすいことがあげられる。また、自然体験では、居住地と異なる自然環境に接することにより自然に対する愛着や居住地における再認識につながる。(2)では、平素と異なる生活環境により団体行動を通じて教師と生徒および生徒相互の人間的な触れ合いが深まる。(3)では、集団行動を通じて自律心の育成・規律、秩序を守る態度は公衆道德についての望ましい体験となる。さらに、近年では社会教育や国際理解教育といった視点からも修学旅行の意義は高い。

本稿の対象とするスキー修学旅行は、居住地と違う自然環境に接することにより自然に親しむ機会を高めることを目的とする。そのため、寒冷積雪地域の学校で行われるスキー授業・スキー遠足とは目的が相違する。実施校の多くは、温暖な西日本地域や東京や大阪をはじめとする大都市圏に集中している。(財)全国修学旅行研究協会によると、平成9年度では全国的な実施率は40%であり、近畿地方の57%を最高に、九州地方の55%、四国地方の38%と続く。また、学校形態では公立高校(138校)が私立学校(20校)を大幅に上回っている。

スキー修学旅行の位置づけは、本来的に旅行・集団宿泊的行事の内容に含むかは微妙である。一般論では、スキー活動を修学旅行に代替しているという見解が強く、(財)全国修学旅行研究協会では体育的な校外学習とすることが望ましいとしている⁵⁾。

2. 高等学校における環境教育の指導内容

日本の環境教育は、1970年代の経済成長に伴う公害問題の顕在化がはじまりと言われる。その後、1990年代には、世界各地で環境問題が指摘され地球規模的な課題として再認識された。このようなことから、次世代を担う生徒児童に対して学校教育の中で環境教育の重要性が強調され、多面的な取り組みがされている。ここでは、1993年文部省が発行した環境教育指導資料(中学校・高等学校編)を用い、主として高等学校の環境教育の指導

内容について確認していきたい。

学校教育における環境教育は、限られた一部の教科で実施するのではなく、各教科、道德、特別活動を通して行うことを基本とする(第1図)。そのため、あらゆる環境事象に多面的なアプローチをし、相互に関連させて総合的に把握することが必要となる。また、学校教育の完結後も、生涯にわたり環境問題の解決や環境保全に対する努力を社会教育・生涯学習を通して発展させる。

高等学校の環境教育に対する指導領域は、小中学校の基礎的内容をふまえ地理歴史科、公民科、理科、保健体育科、家庭科、芸術科、特別活動などで学習される。具体的な内容を見ていくと地理歴史科は、世界史A、Bと日本史Bで文化文明の成立に大きく自然環境が関わること、科学技術の発達が現代文明に大きな影響を与えたことなどで触れ、地理A、Bで世界の人々の生活・文化に関する地域的特色、現代世界における共通課題の認識と解決、地域調査の野外学習など教科内容全般にわたり学習する。公民科は、現代社会で日本生活文化の伝統が自然環境との関連により現在に至ること、人間生活は環境と深く関わること、生態系を維持するための環境保全と倫理などで触れ、倫理で現代社会の特質を理解し、現代に生きる人間のあり方から環境との関連を考え、政治経済で国際社会での日本の役割、現代の経済と国民生活からの問題点より学習する。理科は、総合理科で自然現象の観察や実験を通して自然に対する見方や考え方を養い、教科内容全般で学習し、物理I A、Bで太陽エネルギー利用や放射能の安全問題、化学I Aで塗料と洗剤の問題からの日常生活との関連、生物I A、Bで人間生活での生物との関連、生態系や物質循環、地学I A、Bで資源と人間生活の関連、大気や海水・陸水についての科学的な見方などを学習する。保健体育科は、環境変化に対する健康問題や職場環境における健康問題をふまえた健康管理や安全管理を学習する。家庭科は、家庭一般で家庭経済や消費、衣食住に関する知識により家庭経営・生活の望ましい姿勢を学び、生活技術で生活情報や家庭用機器の安全管理、家庭園芸では家庭生活の能力育成し、生活一般で家族の健康管理のあり方を学習する。芸術科は、美術で自然と造形作品との調和、工芸で工芸と自然や

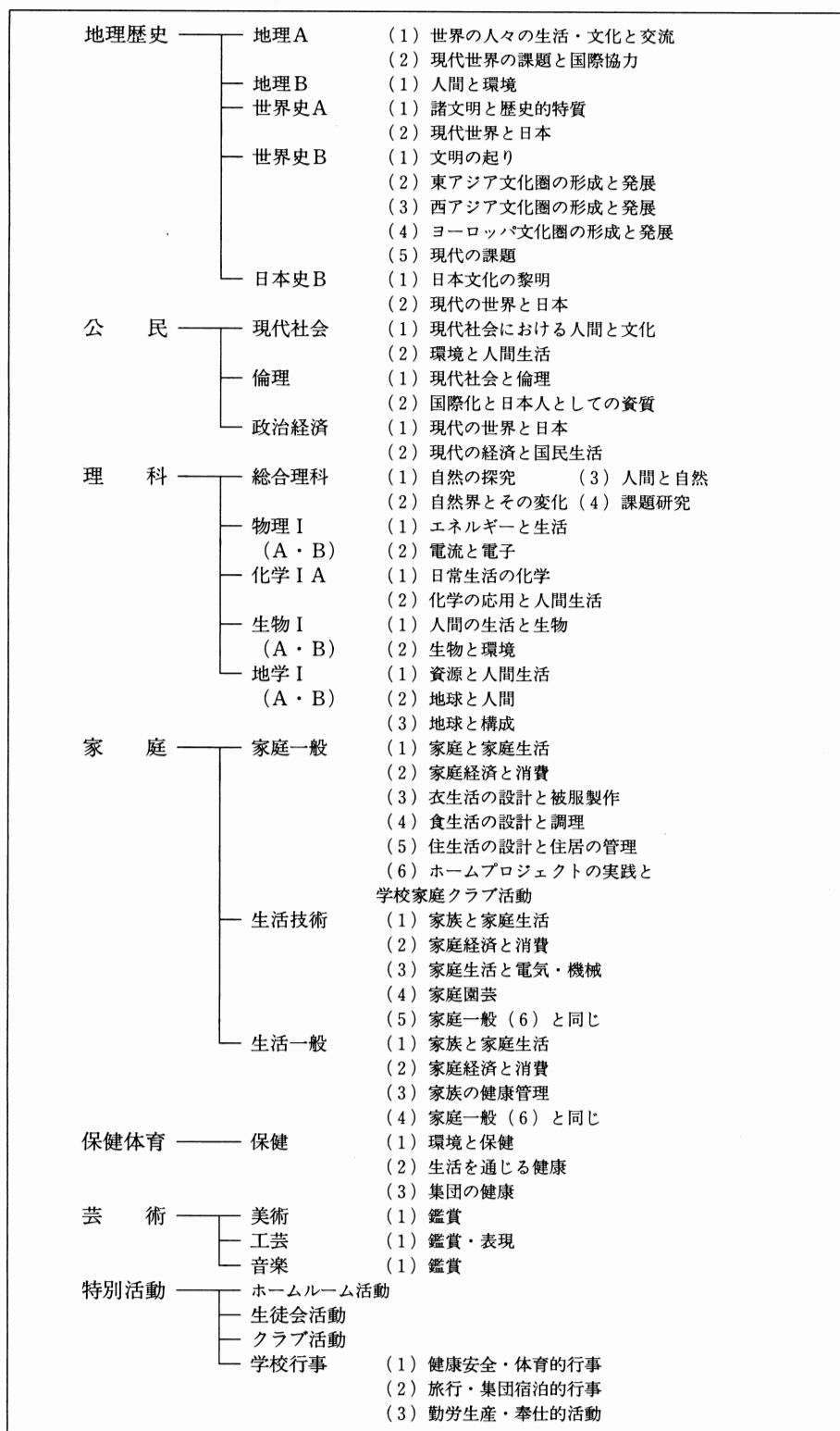


図 1 環境教育関する主な教科別内容（高等学校）

資料) 文部省 (1993) 環境教育指導資料 (中学校・高等学校編) より作成。

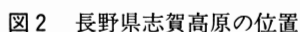
注) 国語 I・生物 II・地学 II の内容は省略。

高等学校では、これらの学習を通して環境問題を総合的に考え判断し、自主的に意志決定ができる能力育成、環境保全や改善に対する能力育成の習得が環境教育の目標とされる。

1. 地理的位置

高原である（第2図）。行政的には下高井郡山ノ内町東部に属し群馬県と県境をなす。また、上信越高原国立公園の中心部に位置する。地形は、横手山や岩管山や東館山などに囲まれた中央部の志賀山から溶岩流により起伏に富んだ標高1400m～2000mの高原ができ、さらに溶岩流の凹部に大沼池、木戸池、丸池、蓮池などの大小さまざまな湖も形成された。植生は、山地帯（ブナ帯）、亜高山帯（シラビン帯）、高山帯（灌木帯）と垂直的変化に富む。

スキー場開発以前の志賀高原一帯は、採取などの農林業活動とごく少数の季節的温泉宿をもつ地



域であり、集落の形成も見られなかった。1927年に長野電鉄が長野市から湯田中まで早期に開通した。現在の所要時間は長野から湯田中まで特急で約40分、志賀高原までさらにバスで約60分から70分かかる。

1929年に志賀高原丸池スキー場が開設され、1930年に長野電鉄の主導のもと観光開発は本格化した。1930年代後半には宿泊施設も通年営業となりスキー場の整備も進んだ。1947年には、日本で最初のリフトが丸池スキー場に架設された。1949年に上信越高原国立公園の指定を受け、スキー場開発は、1955年以降に横手山をはじめとする志賀高原のいくつかのリフトを架設し大規模化した。

それに伴うスキー集落も形成され旅館業を営みながら定住化するようになった。現在、多くの旅館・ホテルが各スキー場に隣接し、スキー客で賑わいを見せている。また、志賀高原一帯には日本猿が生息しスキー場内で見ることができる。さらに、志賀高原スキー場内には熊ノ湯温泉、山ノ内温泉郷には湯田中温泉、渋温泉、上林温泉など温泉地区も有する。

2. 志賀高原スキー場の概要

志賀高原スキー場とは、前山・木戸池スキー場のようなベアリフト1基の小規模スキー場からゴンドラリフトを有する東館山・焼額山・奥志賀高原のような大規模スキー場を合わせた22スキー場の総称である。スキー客は、関東や関西を中心に入り込みが多く、これらの地域から直通バスが多数運行されている。滑走期間も長く11月下旬オープンし最も遅い横手山・熊ノ湯・渋峠スキー場で5月下旬まで滑ることが可能である。雪質は標高が高いため乾いた粉雪で周辺のスキー場と比べ良い。

これら複数のスキー場は、一部を除きスキー場間で連絡コースをもち、最も低いところに位置するサンパレススキー場から奥志賀高原スキー場までリフト・ロープウェイ・ゴンドラを乗り継ぎ移動することができる。このように各スキー場の多種多様なコースを滑走できる醍醐味は他のスキー場で体験できず1つの魅力となっている。

また、リフト券は22のスキー場で共通使用でき、スキー場間移動するシャトルバスも利用できる。

さらに、志賀高原では、早期からIDカード⁶⁾を使用した自動改札機を設置し、リフト待ちの解消を図っている。スキー学校は日本全域のスキー場の中で最も多く、志賀高原全体で26校(SAJ5校、SIA21校)営業し、とくに一ノ瀬スキー場(ダイヤモンド・ファミリー)に多い。

春スキーでは山岳スキーツアーが盛んとなり邦画人気作品「私をスキーに連れてって」⁷⁾の舞台になった草津万座コースをはじめ、山田温泉コースや夜間瀬下りコースがある。さらに1997年には北海道富良野、岩手県雫石に次ぐ国内3番目の開催地となるワールドカップアルペンスキー大会が開催され、翌年1998年には冬季長野オリンピック会場となり、焼額山スキー場ではアルペンスキー回転、スノーボード大回転、東館山スキー場ではアルペンスキー大回転競技が行われ、世界的にも著名なスキー場として位置づけられる。

IV. 志賀高原一ノ瀬スキー場における環境教育的な地域学習の展開

ここで論じるスキー修学旅行の展開は、筆者の経験から特殊なケースと考えられる。一般的なスキー修学旅行は、あくまでスキー活動中心に進められ積雪寒冷地域で行われるスキー授業とほとんど変わらないという印象をもつ。スキー修学旅行では、現地に到着すると指導権がスキー学校に委ねられ、実施校は補完的な役割に終始する。そのため、環境教育的な指導は、実施校よりスキー学校の裁量が大きいと言える。もちろん、実施校の事前指導や事後指導でも環境教育の成果は期待できる。しかしながら環境教育は、自然に親しむ機会の中で学習効果は高く、スキー修学旅行中で学習活動が生かされるべきである。事例のスキー学校は、スキー活動以外に健康管理、安全管理、環境保全、自然環境といった視点にも目を向け環境教育的な芽生えが確認できた(第3・4図)。まず、スキー修学旅行の行程で環境教育的な内容を明らかにし、それをふまえスキー学校の対応を論じる。

1. スキー修学旅行の展開と環境教育的な内容

学校を出発した一団は、長い距離をバス・鉄道・飛行機などを利用し志賀高原に到着する。ホテル到着後、一団が行うことはスキー靴・ビンディング

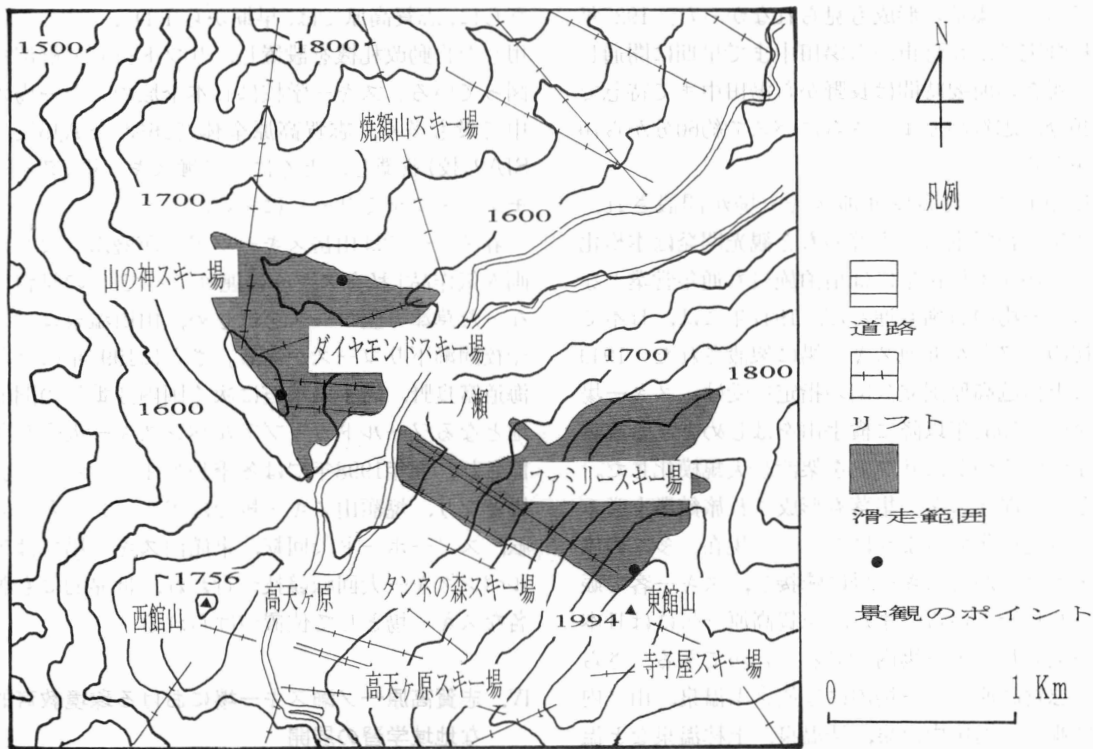


図3 志賀高原一ノ瀬スキー場の概観図

資料) 2万5千分の1「岩管山」を加筆修正

の調整である。多くの生徒は、スキーというスポーツに無縁のため期待を膨らませる第一歩である。この調節にはスキー学校の指導者があたる

次は、各班における指導者の紹介とスキー行動に対する諸注意が行われる。生徒は、3日間のスキー行動を楽しむためにも、どのような指導者が担当するか最も注目する場面である。紹介が進む中で、歓声やため息に包まれる。各班は、生徒数8～20名に区別される。編成人数は、生徒の技術面やスキー学校指導者の登録状況により異なる。班レベル内容は、技術的に編成されるがほとんど未経験者のため運動系クラブの所属が考慮されるほかは出席番号順で分けられる。

スキー行動に対する諸注意は、スキー学校の校長や副校長によって行われる。この講話は、スキー行動のほかスキー場を取り巻く自然環境と人間の関わりを健康管理、安全管理の面から説明する。具体的には、(1)志賀高原が国立公園内の一部に位置し自然環境に恵まれていること、(2)高度な寒冷地域に位置することから室外(マイナス0度以下)

では、風邪による菌が伝染しないこと、(3)雪上では、紫外線が強くゴーグルやサングラスにより目を保護することなどである。このような説明には、生徒は高い関心を示す。これは、日常生活における環境との違いを具体化し、寒冷地域における地域的特色を理解できる。

第1日目は、生徒・指導者にとって重要な顔合わせである。まず、生徒は昨日紹介された指導者のところに集合する。そこで簡単な諸注意を確認して出発する。スキー靴をはきスキーを担ぐことは大変であり最初の試練となる。スキー場に到着後、班行動で実施され、午前中はスキー歩行やターン練習に終始しリフトを使うことはない。指導者は班員と昼食をし、スキーについての感想などを聞き指導段階の指針を決める。多くの場合は、ターンができると少しずつスキーの楽しさを覚える。午後はほとんどの班でリフトに搭乗する。リフトを降りた生徒は、滑る不安などで興奮・緊張状態にある。そこで最初にリフト山頂からの景観を楽しむ。眼下には夜間瀬川・千曲川が見え、自分た

	活 動 内 容	環境教育的な内容
前 夜	ホテル到着 スキー靴・ビディング調整 指導員紹介（班分け） スキー学校校長講話 指導員指導内容確認	・自然環境、健康安全管理
第 1 日	ホテル前班別集合 歩行練習、ターン練習（午前） 昼食（指導員と班員） ターン練習 リフト利用（午後） 指導員技術研修 （夕食後班別ミーティング）	・景観説明 （ダイヤモンドトリプル山頂）
第 2 日	ホテル前班別集合 緩斜面トレーンなど（午前） 昼食（指導員と班員） 緩斜面トレーンなど（午後） 指導員技術研修 （夕食後班別ミーティング）	・景観説明（林間コース）
第 3 日	ホテル前班別集合 天狗コース（午前） 昼食（指導員と班員） 緩中斜面トレーンなど（午後） デモンストレーション 閉校式（スキー学校校長講話） ホテル出発	・景観説明 （ファミリークウッド山頂） ・環境破壊、環境保全 （五輪滑降コース造成予定）

図4 スキー修学旅行行程と事例スキー学校の対応（モデル図）

資料) 筆者の体験にもとづく。

注) スキー修学旅行の行程は、最も一般的なものを示した。

ちのいる場所の高さに驚きを示す。生徒の視野は極端に狭く、リフト搭乗中や滑走中ほとんど周辺の景観を楽しむゆとりはない。第1日目のレッスンが終了すると、初めてスキーをした興奮から会話が弾む。昼食時や夜の班別ミーティングは、スキーについての感想のほか、健康管理の面や自然環境の認識を確認し、常に生徒の立場を考慮することが大切となる。このような点は、通常のスキーレッスンとは違い指導者の裁量が大きな影響を及ぼす。

第2日目は、午前・午後ともトレーン⁸⁾と呼ばれ

る滑走が主体となる。変化に富んだコースを滑走し、生徒もスキー活動に余裕が生じる。この間、適度に滑走中に止まり、周辺の景観に目を向けさせることも重要である。この時、動物の足跡などに注目させると高い関心となり、このような寒冷地でも動物が息していることを確認できる。

第3日目の最終日は、午前中天狗コースと呼ばれる林間コースを滑走し、これまでのスキー活動のまとめとする。ここでも、環境教育的な内容は生かされる。天狗コースは、一ノ瀬スキー場内で最も標高の高い位置を起点とする。山頂は、これ

までの景観の中で最も美しい場所であり、遠方には富士山を望むことも可能となる。生徒は、富士山の展望に歓声をあげる。スキー活動は、午後には終了を迎え閉校式を行う。閉校式は、環境保全の内容を示し、前方にそびえる岩菅山のオリンピックアルペン滑降コースの造成予定について自然保護の側面を混ぜながら説明する。岩菅山は、志賀高原内でもスキーコースの造成がない貴重な自然を有する。このことを自然破壊と景観の美しさの関連から生徒に問いかけていた。この決着は、やがて裏岩菅山の変更を経て白馬の八方尾根に決定となり岩菅山の自然は守られた。しかしながら、男子滑降コースの問題は、八方尾根においてもスタート地点の設定の際、環境保全との関連から解決まで難航したことは記憶に新しい。

このような環境教育的な内容は、スキー学校側からの意識的な働きかけによる。生徒は、スキー活動以外に環境教育の役割を認識し、地域学習としても高い学習効果をもたらすと言えよう。

2. スキー学校側の対応

スキー修学旅行におけるスキー学校の役割は重要である。この修学旅行の成否は、スキー学校次第とも言える。1シーズンにおけるスキー修学旅行の収入は、莫大な利益を生むと言われる。とくに志賀高原一ノ瀬スキー場は、スキー学校が密集し、営業競争が激しい。スキー修学旅行の時期は、通常1月中旬から3月上旬まで集中する。この時期一ノ瀬スキー場は、どのゲレンデも修学旅行生で活況となる。スキー学校の役割は、スキー技術指導であり一般スキーヤーや修学旅行生も変わらない。しかしながら、同じスキー場内に多くのスキー学校が存在する場合は事情が異なる。各スキー学校は、スキー指導技術の向上に重点をはかり、さらに誘因する努力も必要となる。このような営業競争が、環境教育的な指導内容に発展させたと考えられる。事例のスキー学校は、多くの実施校から信頼度が高く継続的な実施を結んでいる。この理由は、スキー技術指導に加え環境教育的な地域学習を行っているからと考えられる。実施校のいくつかは、スキー学校の校長講話、滑走中の景観説明を高く評価している。

スキー学校は、受け入れにおいて指導者数の確

保を課題とする。スキー指導は、特殊性をもつので労働者（指導者）確保には苦慮する。多くのスキー学校は、臨時雇用者により対応している。臨時雇用者の確保は、東京・名古屋・大阪などの大都市居住者に求め、さらに大学生をターゲットとする。これは、スキーシーズンが大学の長期休暇と一致し長期間の雇用が可能となるためである。スキー技術能力は、バッヂテスト2級・3級または同等の能力を有するものを対象とする⁹⁾。

このような臨時雇用者は、事前研修が義務づけられる。この研修は最低1日を必要とし、スキー技術能力の確認のほか、コースの下見や環境教育的な内容導入のポイントを丁寧に説明され、指導内容の徹底化が図られる。他のスキー学校でも事前研修は行われるが、コースの下見がほとんどであり、場合によっては全く行わないケースもある。また、事例のスキー学校では、レッスン後に毎日技術研修が実施され、スキー技術面の向上にも余念がない。

V. 環境教育・地域学習としてのスキー修学旅行を目指して

スキー修学旅行の実施は、環境教育や地域学習など総合的学習としての役割が期待される。しかしながらその実態は、スキー学校任せの形骸化した修学旅行が大半と言えよう。一番の問題点は、実施校の目的が曖昧となっていることにある。筆者の経験からも、現地における実施校引率者の役割は極端に少なく、現地まで往復路の指導のみといった感が強い。その一方で、スキー学校側に期間中の運営を任せ、スキー指導以外に集団規律や団体行動の面まで課すことも珍しくない。このようなことは本来の実施目的と相違し、スキー活動のみの目的に形骸化していると言える。

それでは、どのようなスキー修学旅行が望ましいのかこれまでの知見を加え考えたい。スキー修学旅行は、その主たる活動がスキー活動であるため体育的校外学習のイメージが定着しやすい。そのため、修学旅行という理念も薄れがちになる。そこで実施校は、修学旅行の理念をふまえた総合的学習の視点を再認識する必要がある。とくに事前指導では、集団規律指導やスキー活動の準備のほかに地域学習として地理教育や理科教育の重要

性を強調させる。このような取り組みは、環境教育の役割を高める上で、スキー学校に対しても十分な理解が必要となろう。スキー学校は、すべての修学旅行生はスキー活動を望んでいると限らず、学校行事の一環として取り組んでいることを留意したい。

以上から、スキー活動を通じてどのような環境教育をできるか実施校・スキー学校が相互に模索することにより総合的学習に発展すると考えられる。

注

- 1) メディアゲームは、大型のゲーム機器をはじめテレビゲームやパソコンを利用したソフトゲームが主流である。また、ゲーム機器の小型化・多様化も進み、ゲームボーイやゲーム内蔵型カメラなど最新化は著しい。
- 2) 北海道では、修学旅行の長い行程を宿泊研修(1年次)、見学旅行(2年次)に分割し道立高校を中心に制度化された。とくに宿泊研修は、大雪山登山など野外活動を中心としたものが多い。
- 3) 宿泊研修で使用する青年の家は、時代錯誤を感じさせる集団訓練の内容が現在でも残る。とくに環境教育を展開する有利な場所に位置しながら環境教育的内容・企画に乏しい。大規模校は、受け入れ体制の関係から安易にこれらの施設を利用し、実施内容に疑問を感じながら遂行してきた経緯が強い。宿泊研修における批判的な見解は、武田・後藤(1995)で詳しく論じられている。
- 4) 筆者は、この他に北志賀竜王・斑尾高原・妙高高原・朝日プライム(長野県朝日村)・蔵王ライザースキーワールドスキー場など1週間から2ヶ月の中で活動し、スキー学校での立場は常勤・臨時雇用とさまざまであった。スキー技術能力は、準指導員の資格を有する。
- 5) (財)全国修学旅行研究協会(1998):『修学旅行総覧』p143参照。
- 6) IDカードは、リフト搭乗口に設置されている自動機器に触れカウントされるシステムである。問題点は、積雪により自動機器の高さが相違することや正しく触れないと反応しない、2枚所有しているとカードが破壊されるなどがある。また、カード代金として1000円預け金としてカード返却時に返金される。
- 7) 1980年代のスキーブームを加熱させたヒット映画であり、原田知世・三上博史を主演による志賀高原・草津温泉スキー場を舞台としたスキーラブストーリー。
- 8) トレーンは、修学旅行で用いられる指導内容で、指導

者に続き生徒が滑走するというもの。班員が多い場合は実施しにくい。

- 9) バッチテストは、SAJ・SIA主催で検定内容や級の呼び名が異なる。ここではSAJのバッチテスト検定に触れておく。各スキー場で3回から8回くらいまで1シーズン実施される。1・2・3級の違いは種目に多少の差が生じるが斜面変化によるところが大きい。よって、1級が急斜面で検定が行われ、2・3級は中急斜面や中斜面で行われ主として技術の正確性が採点対象となる。しかしながら各スキー場のコースは一律でなく、また天候や時期、審査員によって認定基準が大幅に相違するのが現状である。通常、指導者としては、2級以上が適当と考えられている。

参考文献

- 市川正夫(1998):志賀高原―開発と現状―、地理43-2、68-73。
- 菊地達夫(1997):本州との比較からみた北海道のレクリエーションスキーの特色と地域性、北海道地理No.71、33-42。
- 菊地達夫(1998):北海道におけるスキー修学旅行の動向、札幌地理サークル会誌31(印刷中)。
- (財)全国修学旅行研究協会(1997):『修学旅行総覧』、p270。
- 白坂蕃(1986):『スキーと山地集落』、明玄書房、p159。
- 武田泉・後藤忠志(1995):学校教育における野外活動の現状と環境教育の理念、北海道地理No.69、57-65。
- 野間晴雄(1998):修学旅行という聖域、地理43-1、18-19。
- 三浦裕(1997):スキー授業におけるつまずきと背景、『子どもの学びとつまずき』北海道教育大学教科教育学研究図書編集委員会編、97-109。文部省(1991):『環境教育指導資料』、大蔵省出版局、p121。
- 吉田隆彦(1998):白馬村―五輪会場と環境問題―、地理43-2、56-61。